ポタポワ Ｈ.Ｂ.

樺太における宗教活動

宗教活動という分野では、南サハリンは文明の十字路ともいうべき特別な役割を果たしてきた。ここでは少なくとも3つの文化が出会っている。即ち、ロシア、日本、そして先住民族の文化である。

ロシア正教　1905年の時点で、南サハリンには、ロシア人約100名、日本人25名のほか先住民族の信者がおり、この人々に対する働きかけは日本の宣教団が行うことになった。1911年の宗務院の決定により「樺太教区」が定められた[1]。これを受けた樺太庁は南サハリンのさまざまな場所で1905年以前に教会で使用していた7つの鐘を豊原に集め、これを南サハリン訪問中の「京都教区」のセルギー主教（日本の宣教団長補佐であった）に引き渡した。セルギー主教は当地を3度訪れていた。日本側は、正教会宣教団の活動のため、教会の用地を10年間無償で提供した。ロシア正教は豊原での教会の復活を目指した。大泊（コルサコフ）、ベレズニャキ村、ダリネエ村にあった教会は戦時中に焼失しており、クレスツィ村、ガルキノ・ウラスコエ村の教会は残っていたが、ロシア人住民がいなくなっていた。名好（レソゴルスク）の教会は日本側から解体を命じられた。それは、新しい集落計画では教会の敷地に道路を建設することになっていたためである[2]。

1911年9月、セルギー主教とともに聖職者ニコライ・クジミンが移動式の祭壇を持って樺太を訪れた。日本側はこれら聖教者に対して肯定的な姿勢を表した。聖職者が道徳水準の向上に資することに期待したからである[3]。日本側の住民や行政機関が信仰の問題に寛容な姿勢を示したにもかかわらず、信者数はあまりにも寡少であり、1945年には正教会は一つも残ってはいなかった。

17世紀以来のキリシタン禁止令は1870年に解除されたにもかかわらず[4]、雑居時代からロシア期を通じて、南サハリンで聖職者が行った宗教活動は日本人住民の間では成功をおさめたとはいえない。南サハリンの教会に残された信徒名簿を調査しても、日本人で洗礼を受けたのは、元仏教徒である北海道出身の２名を数えるのみである[5]。樺太アイヌ人もまた、キリスト教化の過程にはほとんど関与しなかった。Б. О. ピウスツキの記述によれば、正教会の洗礼を受けたアイヌは2名であった。正教会の洗礼を受けたアイヌを、他のアイヌは

---

[1] Епископ Сергий. На Южном Сахалине (из путевых заметок) //Краеведческий бюллетень. – Южно-Сахалинск, 1991. №1. С. 33; Кандидов Б. Японская интервенция в Сибири и церковь. – М, 1932. С. 56.

[2] Епископ Сергий. Указ. Соч. С. 33-141.

[3] Православный благовестник. 1914. №5-6. С. 218.

[4] Боголюбов А. М. Пресса России о русской духовной миссии в Японии (период Мэйдзи, 1867-1912 гг.) // Из истории религиозных, культурных и политических взаимоотношений России и Японии в XIX – XX вв. – СПб., 1998. С. 73, 80.

[5] ГАСО. Ф. 23и. Оп. 1. Д. 3. Л. 222, Д. 32. Л. 1306

「ヌツァ・アイヌ」、すなわちロシアアイヌと嘲笑した[6]。日本との関係が古くからあったアイヌは日本文化の影響を強く受けていたのであった。A. H. クラスノフの観察によれば、「アイヌは日本人こそ自らの主人であると考えていたため、日本人に対しては遠くからでもお辞儀をしながら、傍を通るロシア人は無視することが稀ではなかった」。[7]

1905年以降、サハリンとそこに住んでいたアイヌ（人口は約1300名）は日本の統治下に置かれた。1912年に南サハリンを訪れたワシリエフは、「早いテンポで日本人は少数民族を影響下に引き込んでいるが、そのためにあからさまな暴力をふるう必要はない」と述べている[8]。南サハリンにおいては、それ以前にも先住民のキリスト教化は大きく進まなかったが、この時期、その可能性はゼロになった。セルギー主教は1911年、「僧侶がアイヌの子どもたちに日本語を教えている。異教の寺院で、しかも僧侶のもとで学んでいるのだから、いうまでもなく、アイヌの子どもたちは日本式、つまり仏教式に拝むことを学んでいる」と述べた[9]。B. ワシリエフや同時代の日本人は、アイヌ民族の間である程度仏教が普及していることを指摘した上で、次のように述べている。「しかし、アイヌのほとんどは今でも自分たちのカムイを信仰しており、他の信仰を認めようとはしない。ロシア人がいた時にはアイヌのなかでキリスト教化がみられたが、今日では、そうした傾向はまったく認められない」と述べている[10]。

古儀式派　1905年以降も、南サハリンの荒栗（あらくり）村に、ロシア古儀式派の小さな集団が、「20家族弱」居住していた。1917年になると古儀式派の集団にはロシアからの亡命者が加わり、人数を増した[11]。樺太庁の資料によれば、1927年には「島の南部には62名のロシア人家族が居住しており、そのうち数家族はエフィーモフという姓を名乗っている[12]。」中村喜和をはじめとする研究者によれば、これらは古儀式派の家族であった。この集団において司教

---

[6] Пилсудский Б. О. некоторые сведения об отдельных айнских стойбищах на о. Сахалине // Сборник краеведческих статьей. №2, С. 34; Он же. Рассказ обрусевшего крещенного айна Ивана Григорьевича из с. Галкино-Врасское (Сиянцы) на о. Сахалине о том, как его вылечили от любви // Краеведческий бюллетень. – Южно-Сахалинск, 1994. №1. С. 97.

[7] Краснов А.Н. На Сахалине. Из воспоминаний путешественника по востоку Азии // Исторический вестник. 1894. Т. 55. №3 С. 713. Об этом же см.: Пилсудский Б. О. некоторые сведения об отдельных айнских стойбищах…С. 23; Stephan John. Sakhalin. A History. - Oxford: Clarendon Press, 1971. P. 36-37

[8] Юркевич Т. С. Современная Япония. – Владивосток, 1925. С. 144; Васильев В. Краткий отчет о поездке к айнам…С. 20.

[9] Епископ Сергий. Указ. Соч. С. 33.

[10] Васильев В. Указ. соч. С. 22; ГАСО. Ф. 1170. Оп. 1. Д. 40. С. 189.　『補注』参照。

[11] Васильев В. Краткий отчет о поездке к айнам островов Иезо и Сахалина. – СПб.,1914. С. 24. Об этом же см.: Канторович В. Сахалинская повесть. – М., 1971. С. 91; Федорчук С. Русские на Карафуто. – Южно-Сахалинск, 1996. С. 28.

[12] Накамура Е. Староверы Южного Сахалина // Алтарь России: Материалы научно-практической конференции 19-25 сентября. – Большой Камень, 1997. С. 21.

を務めたのは、1920年代半ばまでカムチャツカに住んでいたB. B. ザジガルキンであった[13]。古儀式派の集団は、孤立して暮らしていたが伝統を守り、子どもたちのための学校まで開設していた。生業は主に畜産業であった。日本川の資料によれば、古儀式派の人々は裕福であった[14]。1945年に南サハリンにソビエト権力が樹立されると、ロシア連邦共和国刑法第58条に規定されている反ソ活動の嫌疑で彼らの逮捕が始まった。新しい権力や移民者たちは、彼らを富農であり、日本のスパイとみなした。古儀式派を含む日本統治下で居住していたロシア人がソ連の市民権を得るのは1950年以降になってからのことであった[15]。

カトリック　南サハリンに残留しカトリックの信徒は、函館教区が保護することになった。1907年からはフランス人、ドイツ人宣教師が南サハリンを毎年訪問するようになったが、「サハリンのポーランド人はあまり熱心にミサに参加しなかった。まったく教会に通わないものもいた」。セルギー主教の証言によれば、彼らはサハリン島を訪れるロシア正教会の聖職者たちを喜んで受け入れたという[16]。ドイツ人宣教師でフランシスコ会員のアグネリウス・コワレッツの尽力により、1912年に豊原に小規模な教会が設けられた1915年には札幌教区が設立され、サハリンはこの教区に含まれることになった[17]。1945年には南サハリンに4つの教会があった（ユジノ・サハリンスク、ホルムスク、コルサコフ、コルサコフ地区のキンメナイ）。カトリック教会の聖職者は、司祭が4人、使徒座管理者が1名で、その内訳はポーランド人が4名と日本人が１名であった。ユジノ・サハリンスクの教会には修道僧パナス・ザハリヤもいた。これら聖職者たちは1932年から豊原に居住していた。南サハリン在住の宣教団に対する監督は、北海道から来訪するナガサキ・チコヒダという聖職者が担当した[18]。終戦期にサハリンに残っていた聖職者はフェリックス・ヘルマン、ラファル・クルコフスキー、グスタフ・スティシャク、ザハリアシュ・バナシュである。1945年8月にはカトリック信者は800名いた。信者の民族別構成は日本人、朝鮮人、ポーランド人で、いずれも長期にわたってサハリン島に居住していた[19]。カトリック教徒や日本人が祖国に帰還した1948年末をもって、サハリン島のカトリック史は終焉した。

戦争直前の時期の南サハリンには**プロテスタント系**の教会が5つ存在していた。それらがどのような宗派に属していたかを確認することは不可能である。というのは、ソ連側資料では、これら教会がプロテスタントと呼ばれたり、バプティズムと呼ばれたりしており、両者は同義語のように扱われているからである。日本側の資料に基づいて判断すると、当

---

13 Федорчук С. Указ.соч. С. 52.
14 Накамура Е. Указ.соч. С. 22.
15 Федорчук С. Русские на Карафуто. – Южно-Сахалинск, 1996. С. 33.
16 Епископ Сергий. На Южном Сахалине (из путевых заметок) //Краеведческий бюллетень. – Южно-Сахалинск, 1991. №2. С. 64.
17 Федорчук С. Римско-католическая церковь на Сахалине. -Южно-Сахалинск, 1998. С. 22.
18 Федорчук С. Римско-католическая церковь на Сахалине. - Южно-Сахалинск, 1998. С. 57.
19 ГАСО. Ф. 53. Оп. 1. Д. 75. Л. 7-8. Л. 16-17.

時の樺太には非伝統的なキリスト教の組織も存在していた。豊原警察署の資料には「きよめ教会」という宗派が1934年から活動を行っていたとの情報が含まれている。「ユダヤ教を信仰するが、旧約聖書だけでなく新約聖書も用い、死後の世界での生命を信じ、敬虔な信仰を持って祈れば、神は願いを聞き届けると考えている」。この宗教組織は豊原にあり、主宰者は鈴木二郎。真岡、多蘭泊、本斗、恵須取に支部があった。信徒数は豊原で13人、他の町では1～3人であった[20]。

1947年1月の調査によれば、サハリン南部には2つのプロテスタント教会があったが、信徒はそれぞれ8名と1名しかいない。ソ連側の資料によれば、宗教儀式から判断すれば、両者とも「バプティストに属するようである」。南サハリンの都市に教会が今後も存続することは、「きわめて不適切である」とされ、祖国帰還の第一陣で聖職者を送り出すことが「必要である」と指摘されている[21]。

神道は支配的であり、日本において国家の宗教であった。サハリン島における神社建設は18世紀末にまで遡る。19世紀後半にはクシュンコタン（現在のコルサコフの中心部）、南濱（ホルムスク）、ウシヨロ（オルローヴォ）の商館の敷地内、ライチシ等に設けられていた。神社の建設がもっとも積極的に進められたのは樺太庁の時代であった。И. А. サマリンの計算では、樺太庁期に建立された神社は128社に上る[22]。

樺太庁時代の宗教において、影響力で第二の位置を占めたのは**仏教**であった。仏教には幾つかの宗派があるが最も多いのは浄土真宗で48カ寺、それに次ぐのは曹洞宗の20カ寺であった[23]。1945年、サハリン南部には宗教施設が250箇所以上（仏教寺院が150、神社が50、天理教会が50、カトリック教会が4、プロテスタント教会が5）あった。1947年1月1日現在では153の宗教施設が州内に残っていた。1948年1月1日には日本の宗教施設は15（仏教寺院が13、カトリック教会が2）であった[24]。宗教施設の一部は戦闘行動の過程で焼失し、他の一部は日本人聖職者の祖国帰還により消失した。ソ連軍人による略奪を受けたケースもあった。戦後期の資料によれば、「宗教関係者による反ソ連的動きはなかった」[25]。日本人の祖国帰還が進むにしたがって、宗教儀式も行われなくなり、聖職者の生計が成り立たなくなった。それに伴って、帰還を申し出る聖職者が相次いだ。日本統治期の宗教施設の多く

---

[20] ГАСО. Ф. 1. Оп. 1. Д. 75. Л. 10-12 (на яп.яз.)

[21] ГАСО. Ф. 53. Оп. 1. Д. 81. Л. 9-10.

[22] Самарин И. А. Синтоистские храмы Карафуто // Вестник сахалинского музея. -Южно-Сахалинск, 1999. С. 156-159, 199-201.

[23] Лопачев А. М. Храмы скромные и пышные. Японские храмы на Южном Сахалине. 1945 год // Советский Сахалин. 1992. 11 августа. С. 3; ГАСО. Ф. 1170. Оп. 1. Д. 40. С. 98. 『補注』参照。

[24] Савельева Е. И. Вероисповедание и власть на Южном Сахалине после окончания Второй мировой войны // Духовная жизнь Дальнего востока России. Материалы региональной научно-практической конференции, посвященной 2000-летию христианства. Хабаровск, 24-26 октября 2000 г. – Хабаровск, 2000. С. 70.

[25] ГАСО. Ф. 53. Оп. 1. Д. 81. Л. 1-9.

は1907～1910年にかけて建立され、1945年までには老朽化が進んだ。聖職者が祖国帰還した後は、宗教施設は閉鎖され、その財産を保護する者もいなかった。1947年には、ソ連科学アカデミーサハリン科学研究基地の研究員たちが、「日本の宗教の重要な歴史的記念物」であるとして、ユジノ・サハリンスクのケイトク(校注：景徳)寺と樺太神社を科学研究基地の管理下に移管するよう州ソビエト執行委員会に要請した。しかし研究者たちの提案は無視され、これら宗教施設はまもなく破壊された[26]。最後の日本の宗教施設も1948年末には活動を停止した。

荒井信雄訳

[26] Костанов А. И. Указ. соч. С. 64.